

海岸を活かした地域活性化に関する研究

～津波避難施設の平時利用を事例に～

Research on local revitalization by means of the beach
 ~Tsunami evacuation facilities used during normal conditions as a case example~

水循環・まちづくり・防災グループ 研究員 北澤 史
 水循環・まちづくり・防災グループ グループ長 阿部 徹
 水循環・まちづくり・防災グループ 研究員 和田 彰
 主席研究員 水草 浩一

1. 研究の背景と目的

近年、海水浴や潮干狩りなど従来のアクティビティ以外の新たな海岸の楽しみ方や、夏季に留まらない通年で新たな利用者の獲得等が各地で模索されている。国の提言「砂浜の利活用の更なる促進に向けて」では、背後地・背後施設との連携が解決の一手法であることが示されているが、具体的な事例研究が十分蓄積されているとは言い難い。

本研究は、全国各地の海岸を活かした地域活性化に関する取組みの中から背後施設を活用した事例を対象に、活動の経緯、目的、内容、発展性を調査・分析し、他の自治体の参考となる仕組みと課題を検討することを目的とする。

2. 研究の方法

海岸を活かした地域活性化の事例として、茨城県大洗町の大洗サンビーチ津波避難施設の平時利用を取り上げる。大洗町の総合計画・戦略や各種施策の中では、貴重な地域資源として海岸が位置づけられ、大洗サンビーチでのビーチスポーツ推進や町の魅力発信、雇用の場としての海岸の多面的活用を掲げている。海岸行政やまちづくり分野において、平時利用を含めた防災・減災機能の向上が主要施策に位置付けられる中、大洗町は先行して海岸の魅力発見や利活用と津波・侵食対策の両方を融合して活性化を進めている。さらに、コロナ禍で海水浴場の閉鎖を余儀なくされながらも海の新たな活用の好機と捉え、様々な取組みに挑戦した先駆的な地域でもある。

本研究では具体例として、夢 town 大洗スポーツクラブ（以下「夢 town」という）のセグウェイ体験やヨガ教室等、一般社団法人大洗観光協会（以下「大洗観光協会」という）の砂浜図書館、夢 town と当研究所の共催での天体観測会を取り上げる。関係者へのヒアリングや提供資料を基に、活動の継続や活性化に資する要素を抽出した。

3. 大洗サンビーチ津波避難施設

大洗サンビーチ津波避難施設（通称、ビーチセンター）は、東日本大震災を教訓として茨城県が実施する津波高

潮対策事業と一体的に整備され、平成 29 年 7 月に完成した。鉄筋コンクリート 2 階建てで、ユニバーサルビーチを標榜する広大なサンビーチにおいて、有事の際の逃げ遅れが想定される車椅子利用者、身体の不自由な方など約 180 名を収容することが可能である。管理者は大洗町で、設置及び管理に関する必要事項は、「大洗サンビーチ津波避難施設の設置及び管理に関する条例」（平成 29 年 6 月 8 日条例第 14 号）に定められており、第 5 条で「年間を通して（略）、地域活性化に資する拠点として活用することができる」とされている。大洗サンビーチは、大洗港区海岸（港湾事務所管理）と大貫海岸（土木事務所管理）に跨っているが、大洗サンビーチ津波避難施設は大洗港区海岸に位置している。



写真－1 大洗サンビーチ津波避難施設の全景

4. 検討の内容・結果

(1) セグウェイ体験・ヨガ教室等

①企画・運営体制

夢 town は、大洗町総合運動公園内に事務局を構える民間団体である。平成 29 年度から令和元年度までは大洗町から「ビーチスポーツを核とした海辺の賑わい創出事業」（地方創生推進交付金）を受託し、令和 2 年度は自主財源で大洗サンビーチ津波避難施設内に通年で職員を常駐させ、ビーチでの新しい楽しみ方を提案していた。

②実施内容

セグウェイ体験やフルムーンヨガを企画・実施した。セグウェイ体験は、公道を走行できない弱みを逆にとり海沿いにコースを設けた。1 時間弱のプログラムで参加費は 5,000 円/人である。フルムーン

ヨガは津波避難施設のデッキで満月を眺めながら行う人気の教室で、大洗町内外からも参加があった。その他、平日9時～10時は無料のノルディックウォークの実施や、民間企業や公的機関による防災研修会開催の会場提供を不定期で行った。

③成果と課題

津波避難施設を活用し実施した点は成果であるが、その財源の大部分は交付金であり、事業ベースでの成立は難しい。また、セグウェイ体験のコース設定に際し、海岸の所管が複数に跨ることによる許可手続きの煩雑さ等の課題も浮かび上がった。大洗町役場内では、津波避難施設の管理をまちづくり推進課で一貫しておこない、夢 town と大洗町とで様々な利活用を検討したものの、海岸管理者の許可が得られず実現できなかった内容もあった。海岸及び津波避難施設の利用に関わる行政機関との緊密な事前調整や連携による合意形成プロセスが重要となる。

(2) 砂浜図書館 (夏・秋)

①企画・運営体制

大洗観光協会では、旅館業(宿屋)に加え、他分野の若手主体による事業戦略チームを設置し、10人＋オブザーバー(大洗町職員)2～3人で、月1回会議を行っている。3年ほど前から地域資源を活かした観光振興の企画を立案し、海水浴以外の海の楽しみ方や、新たな利用者の獲得を模索しており、「砂浜図書館」もその企画の一つとして立案され、令和2年8月と10月、11月に開催した。

②実施内容

夏は8月1日～8月23日まで、秋は10月31日～11月15日まで開催した。津波避難施設の1階部分を、本の貸し出し(800冊準備)や、受付、待機場所、ドリンクコーナーとして活用した。津波避難施設付近の砂浜には、タープやパラソルを張り、椅子を準備し日陰で寛ぎながら読書を楽しめるようにした。夏は大洗観光協会の自主財源、秋は観光庁「誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成」実証事業の助成を受けて準備を進めた。参加費は夏は無料、秋は昼の部500円 夜の部1,000円(それぞれフード券300円付)、大学生以下無料とした。

③成果と課題

夏は開催期間中約1,500人(ほぼ毎日満席で整理券対応)、秋は夏よりやや少なめであった。砂浜図書館に際しては、飲食の販売も考えたが、コロナ禍で海水浴場が閉鎖になり毎年出店する売店も営業できない状況等を考慮し、ドリンクの販売に留めた。今後コロナが収束した通常時であっても海岸における飲食販売に際しては、海の家等地元事業者等との調整が必要になると考えられる。

(3) 天体観測会

①企画・運営体制

津波避難施設を活用した海岸の通年利用や、施設の防災教育や地域交流の拠点化を見据え、夢 town と当研究所の共催で大洗観光協会と大洗町の協力を得て社会実験的なイベントを企画した。冬季が天体観測に適した季節であることを活かし、惑星観測家の指導を受けながら天体講座と天体観測会を企画し、令和2年12月に「波音と星空～ビーチセンターde天体観測会」を開催した。

②実施内容

星空案内人である惑星観測家の阿久津講師、増子講師による惑星接近のしくみ、星座の由来や日本人の生活と星との関わりについての座学と天体観測を実施した。天候にも恵まれ、木星と土星の接近、月、アンドロメダ銀河、オリオン星雲を順に観測することが可能となった。望遠鏡での観測は初めての人が大半で、参加者からは「非常に貴重な体験となった」、「ぜひ季節ごとに定期開催して欲しい」との声が寄せられた。

③成果と課題

茨城県内各地より定員に迫る17名の参加を得た。参加者アンケートからは企画への満足度の高さが何われ、今回は参加費無料であったが、「有料でも構わない」との回答が約9割、支払い意思額は500～2,000円で多くが1,000円でも参加するとの回答であった。継続性の為には、有料化の検討も必要である。



写真－2 望遠鏡を覗いて観測する参加者

5. 今後に向けて

本研究を通じて、大洗サンビーチでは民間団体や大洗観光協会が、民間のアイデアで企画し交付金や助成金、自主財源を活用して新たな海岸の利活用を進めていることが明らかとなった。津波避難施設の活用により、季節や天候の影響を最小限に抑えた利用が可能になったことが確認できた。今後は、所管を超え行政や民間事業者等の関係者が連携してイベントを企画・開催し、その中でいかに収益を挙げ持続可能な取組みとしていくことが求められる。津波避難施設での飲食物の販売、レンタル事業(GW期間中の潮干狩りグッズ)等、既存の売店組合等の民間事業者どうしの調整も行いながら、実施できそうな取組みから始めることが重要と考える。